HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	61人の階級的同胞のために ： 平陸事件と連環画
Author(s)	中野, 徹
Citation	連環画研究, 4, 85-106
Issue Date	2015-02-01
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98416
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98416
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_4_85-106.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『連環画研究』第４号　2015 年２月

61 人の階級的同胞のために──平陸事件と連環画

中野　徹

はじめに

1960 年 2 月、中華人民共和国山西省平陸県で道路建設工 61 名が食中毒を起こす事件があった。いわゆる平陸事件である。食中毒の原因は、何者かによって食事に混入された砒素であった。砒素混入事件といえば、1998 年、和歌山市園部地区で行われた夏祭りのカレーに砒素が混入された事件を思い出す方もいるであろう。



『為了六十一個階級弟兄』
（中国青年出版社、1960）

この平陸事件において不幸にして砒素中毒症を起こした患者 61 名は、山西省平陸県のみならず、北京市の薬品関係者や人民解放軍空軍にいたるまで、何百人もの人々が奔走したおかげで、一人も命を落とすことなく、全員が救われた。この出来事は、『中国青年報』でルポルタージュ「為了六十一個階級弟兄（61 人の階級的同胞のために）」が掲載されるやいなや、他の新聞に転載され、また映画、連環画、話劇などの媒体に次々に改編されたほか、救助に携わった人々を賞賛する詩や歌曲が作られ、多くの人の知るところとなった。このエピソードは、文化大革命後に国語教科書にも採用されており、年配の方であれば知らない人はいない、社会主義中国を代表する「美談」のひとつと言える。この美談に関する書籍の多くには薬品運搬の際に用いられた落下傘が描かれている。

本稿では、中国版砒素混入事件ともいえる平陸事件をめぐる報道、その改編作ブームを整理し、平陸事件の顛末とその裏側を押さえたうえで、一連の平陸事件報道のなかで連環画が果たした役割について考察したい。

平陸事件

まずは事件が起きた平陸県の位置を確認したい。平陸県は山西省運城市に属する。

運城市は山西省の南西部にあり、西は陝西省、南は河南省と接している。平陸県は、南は黄河に面しており、その対岸は三門峡ダムで知られる河南省三門峡市である。平陸県は山西省の省都太原とは約 500 キロ、北京とは陸路で約 1200 キロ、直線距離にして約 900 キロ離れている。山西省東部には、山西省と河北省、河南省にまたがる太行山脈が広がっている。抗日戦争（日中戦争）時、八路軍の拠点があったことでも知られる太行山脈は標高 1500 から 2000 メートル級の山々からなる。1960 年当時、北京から物資を平陸に運ぶとするならば、空路を使っても太原からは陸路となり、少なくとも二三日は確実にかかっていたと思われる。まして陸路や水路を使えば、さらに日数を要しただろう。



関連地図

事件は、1960 年２月２日、北京から遠く離れた山西省平陸県の張村公社が請け負っていた風南公路の道路建設現場で起こった。道路建設工たち 61 名が嘔吐を伴う中毒症状を起こしたのである。

翌日、平陸県共産党委員会からの緊急要請を受けた北京市特殊薬品経営部は、重金属中毒の解毒剤“二疏基丙醇”（ジメルカプロール。分子式 C3H8OS2）をすぐに手配するが、薬品の運搬が問題となった。重篤な症状を見せている 14 名は遅くとも４日の朝までに解毒しなければ命を落とす危険性が高い。衛生部があちこちに掛け合った結果、人民解放軍空軍が薬品の運搬を担当することになった。空軍機は北京を飛び立ち、平陸上空から薬品を投下し、平陸県は薬品の回収に成功。これにより、61 名の砒素中毒患者たちは危機を脱し、全員一命を取り留めることになった。

人々の善意と智恵の結集によって 61 名の命が救われたこの事件を、当時のメディアはどのように報じたのであろうか。

『中国青年報』「為了六十一個階級弟兄」

このニュースは2月４日に地元紙の『平陸日報』で報じられ、その記事は『北京晩報』に転載された。その平陸県での食中毒に関する記事が『人民日報』に転載されたのが２月７日。事件発生から5日後のことであった。

『人民日報』1960年2月7日に掲載された楊樹荘「千里急救（千里のかなたから救急）」は、平陸での食中毒事件のあらましを報道している。その後、『人民日報』紙面での平陸事件に関する記事は、空軍の活動を称える祝作輝「穿雲破霧救親人（雲をつき霧を

ぬけ家族を救助）」（21日）、食中毒症状から回復した平陸県の道路建設工が感謝の意を伝えに上京したことを報じる「平陸県中毒民工全部脱険　深感千里急救之情平陸派人来京道謝（平陸県で中毒を起こした建設工全員が危機を脱し、千里のかなたから救急した情けに深く感じいり平陸県は北京に感謝の意を伝えに派遣）」（23日）、救急活動に携わった北京の関係者を称賛する「表揚千里救民工的崇高行為　衛生部奨励特殊薬品経営部和空軍某部機組（千里のかなたから建設工を救った崇高な行為を表彰し、衛生部は特殊薬品経営部と空軍の某クルーを褒賞する）」（3月2日）など、続報が次々に掲載されている。

平陸事件が全国的にひろく認知されるきっかけとなったのは、『中国青年報』1960年2月28日に掲載されたルポルタージュ「為了六十一個階級兄弟」だ。『中国青年報』は平陸での中毒事件を知ると、山西省平陸県に記者を派遣し取材にあたらせた。翌29日、『人民日報』は第２面全面を使い、中国青年報の記者、王石と房樹民の手になるこのルポを『中国青年報』２月28日社説とともに全文転載している。その際、李斛[1]による挿絵２幅が掲載された（右下の拡大図は、上空から落下傘を使って投下された薬品を平陸県の人々が迎えるもの。列の先にある光は落下点の目印とされた篝火）。

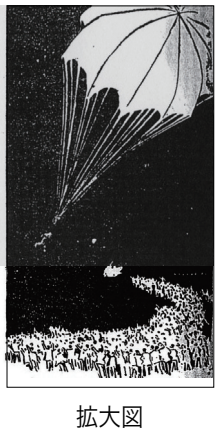

伟大的阶級友爱精神　崇高的共产主义風格

为了六十一个阶級弟兄

又一曲共产主义的凯歌

『人民日報』1960 年 2 月 29 日第２面

実在の事件に取材して書かれたこのルポは、その冒頭が、いわゆる「錯時法」を用いて記述されているのが印象的だ。事件のあらましを時系列に沿って叙述するのではなく、事件が起きた平陸から遠く離れた北京、しかも事件発生翌日から語り起こし、救助のために奔走するさまざまな人々の動きを時間ごとに記述している。


拡大図

1960年2月3日午後4時。春節を迎えたにもかかわらず、北京市特殊薬品商店経営部の従業員たちは休みなく忙しく働いていた。この日は楽しみにしていた商工会の春節の夕べがある。まもなく退勤時間というときに一本の電話がかかってきた。長距離電話の発信元は、北京から遠く離れた山西省平陸県。61名の道路建設工

が食中毒に遭い、その治療薬として、解毒剤ジメルカプロールのアンプル1000本が必要だという。4日の夜までにジメルカプロールを送りとどけなければ61名の命は助からない。山西省の省都の太原までではなく、平陸県まで直接空輸を至急求める電話だった。

後で連環画を見てゆくことにしてここでは詳述しないが、このルポルタージュは以下の時間の流れで、山西省平陸県と北京の関係部署の複数の視点から語られてゆく。なお、「　」に挙げる時間は、ルポルタージュ「為了六十一個階級弟兄」の原文の引用である。

1960 年

2月3日　【北京】「旧暦正月七日　現在、午後四時ちょうど」
　　北京市特殊薬品商店経営部に平陸県から緊急の電話がかかる

2月2日　【平陸県】「山西省平陸県　夜7時」（中共平陸県委員会）
　　会議中に61名の食中毒患者が出たことが知らされる

——【平陸県】「ちょうど同じ時刻」
　　解毒剤を求めに黄河対岸の三門渓市へ派遣
　　夜通し薬を探すも近隣には存在せず、北京に救援を求めることに

2月3日

——【北京】「午後4時過ぎ、衛生部」
　　空輸の方法を検討　空軍に援助を求める
　　「現在、すでに午後5時過ぎ」
　　ジメルカプロールがバイクで運ばれる

——【北京】「ちょうど同じ時刻」（特殊薬品商店）
　　空軍の支援をとりつける

——【平陸県】「ちょうど同じ時刻」（張村公社の病院）
　　平陸県から援助物資が送られる。
　　山西省人民医院と臨汾人民医院から医師が派遣される

——【北京】「現在、時間はまもなく夜7時」（特殊薬品商店）
　　ジメルカプロールを入れる箱が準備される
　　薬品を詰める箱に目印となる電飾を施すために五洲電料行に依頼

——【北京】「現在、7時半すぎ」（特殊薬品商店）
　　衛生部からの車が特殊薬品商店に到着
　　ジメルカプロールを空港に運搬

——【平陸県】「ちょうど同一時刻」（郵政局）

北京から来電
平陸県、空軍が薬品を投下する際の目標となる篝火をたく準備をはじめる
――【北京】「現在、夜9時3分」
空軍機離陸
――【平陸県】「現在、夜11時23分」
空軍機、平陸県上陸に到着
――【平陸県】「同一時刻」
篝火がたかれ、人々は懐中電灯を照らし、空軍機に投下地点を示す
落下傘が開きジメルカプロールが平陸県に届く
――【平陸県】「2月3日、深夜」（張村公社医院）
薬が到着し、患者に治療が施される
2月5日
――【平陸県】
平陸県の幹部らが61名の労働者が見舞いに訪れる
人々は中国共産党と毛主席、首都の人々への感謝を述べる

上記のように、北京の衛生部、特殊薬品商店、空軍、平陸県の人々など、救援活動に携わった人々の動きがめまぐるしくつなぎ合わされている。おそらく実際の事件の時刻に基づいていると思しい時間の経過が繰り返し明示されることで、救援活動に緊迫感を与えている。人命救助は時間との戦いでもあるのだ。

行政区画や部署の枠を越えた人道的支援で多くの命が救われたこの話は、中国共産党や毛沢東主席への感謝のことばで締めくくられる。ルポルタージュ掲載日の『中国青年報』1960年2月28日の社説「又一曲共産主義的凱歌（共産主義の凱歌またひとつ）」は平陸事件の救助活動に携わった人々を称賛しつつ、以下のように締めくくる。

> 平陸事件の顛末は、もっとも生彩ある共産主義の教科書の一課となっている。我々はすべての青年たちが真剣にこれを学び、この事件に関わった同志たちの高尚な風格と自己犠牲の精神を学び、職務に忠実な態度を学ぶことを望む。とくに共産党の指導者の役割と党の労働人民に対する限りない思いやりを深く感得することを望んでいる。我々は、この輝ける事件から共産主義の教育を受け、党と人民を永遠に愛し、永遠に勤勉に、活気に満ち溢れながら人民のために奉仕しなければならない。[2]

この平陸事件のルポルタージュが掲載された意図は非常に明瞭だろう。プロパガンダとしての「美談」は、その10日後、爆発的な速度で広められてゆく。

メディアミックス的展開

平陸事件は、『中国青年報』のルポルタージュ掲載後、さまざまなメディアに改編され、より多くの人々の知るところとなった。『人民日報』は1960年３月９日に再度、「学習和発揚偉大的共産主義風格（偉大なる共産主義の風格を学習し発揚しよう）」と銘打ち、この平陸事件について第2面全面を使って大々的に報じている。この際、中央美術学院の集体創作による連環画10幅が掲載されており、それぞれ事件に関わった各部署の活躍が描かれている。

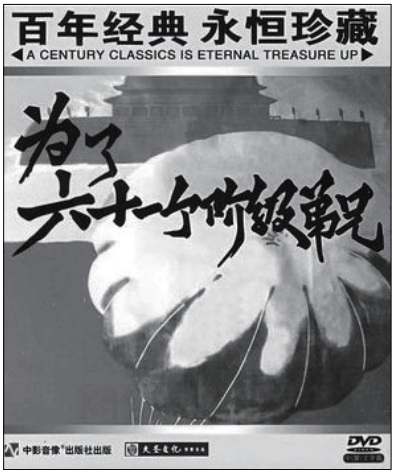
文芸界は驚くべき速度でこの動きに競うように反応した。李敬斎「“為了六十一名階級弟兄”背後的故事（“61名の階級的同胞のために”背後の物語）」[3]によると、中央戯劇学院実験話劇劇院が10日かけて全８場の話劇をつくり、３月９日に上演したのを皮切りに、中国青年芸術劇院も同名の話劇をつくっている。また、中国戯劇出版社の陳北鴎らは一晩で脚本を作り、北京実験評劇団がその脚本完成を待ち、その夜にはリハーサルをし、わずか18時間で劇を作り



中央美術学院集体創作「為了六十一個階級弟兄」
『人民日報』1960 年３月９日第８面

上げた。また、北京曲芸劇団は定番の演目を取りやめ、68時間で作った歌劇を上演したという。9日から北京では演劇の上演が一斉に始まっており、以降の『人民日報』掲載の劇場上演案内からは「為了六十一個階級弟兄」の上演が月末まで満席であったことがわかる。なお、これらの演劇脚本も発表されている[4]。

平陸事件は舞台化のみならず映像化されている。映画「為了六十一個階級弟兄」（謝添・陳方千監督。北京電影製片廠、1960）は、3月中の上映を目指し、短期間で製作された。わずか22時間で脚本が書き上げられ、北京の劇団や映画スタジオの協力を得て人員や機材が集められ、北京と山西平陸の2か所での撮影は16日間で終了する。その後、録音、フィルムの現像がただちに行われ、作品完成後、すぐに3月30日に北京の58の映画館などで上映された[5]。また、映像化にあたり、全六楽章からなる合唱曲が作られている[6]。



映画『為了六十一個階級弟兄』DVD

舞台化、映像化のほかに、広くこの出来事を宣伝し、人々が学ぶことができるように注音付きの通俗読物も刊行されている[7]。


人流如潮，大家向降落伞欢呼！

luò！ rén liú zhuī zōng zhe jiàng luò sǎn piāo luò，pǎo a！
落！大流追踪着降落伞飘落，跑啊！
pǎo a！guō féng héng xiàn zhǎng xiàng jiàng luò sǎn pǎo qù，
跑啊！郭逢恒县长向降落伞跑去，
pí miàn pèng jiàn le pǔ jù yǎn yuán yáng guǒ wá，zhè shì
背面碰见了蒲剧演员楊果娃，这是
gè shí liù suì de nǚ hái r，chàng xiǎo dàn de。tā de liǎn shàng
个十六岁的女孩，唱小旦的。她的脸上
hái mǒ zhe hóng hóng de yān，xì zhuāng yě méi xiè，quán
还抹着紅紅的粉，戏装也沒卸，全

ピンイン付掃盲補充読み物
『為了六十一個階級弟兄』
（文字改革出版社、1960）

ひとつの物語が小説、映画、演劇、評書（講談）などさまざまな媒体に改編され、人々に享受されることは、中華人民共和国成立後の物語によく見られることである[8]。しかし、この平陸事件に関する改編作で注目される点はその製作期間の短さであろう。事件発生からしばらく経ち、ひとたびクローズアップされると、一か月も経たないうちにさまざまな媒体で競うように改編作が次々に生み出されている。61人の救出劇に部署を越え、多くの人々が参加したように、文芸界全体がなにかの熱に浮かされているかのようだ。3月9日の『人民日報』での報道や同日に始まった演劇の上演を考えると背後でなんらかの指示が出ている可能性が高い。

この平陸事件をめぐる報道の高まりは当然連環画界にも広く及んでいる。次に連環画界の動きを具体的に見てみたい。

連環画は事件をいかに伝えたのか──その1

3月9日の『人民日報』に中央美術学院の集体創作による10幅の連環画が掲載されたことはすでに述べたとおりである。「為了六十一個階級弟兄（連環画創作情況総合報道）」（『美術』1960年第3期）には、当時の連環画界が平陸事件に対していかに敏感に反応したのかが記されている。

中央美術学院では3月6日に「芸術はいかに政治に奉仕するか」というテーマで議論され、その席上で「為了六十一個階級弟兄」を創作することで政治に奉仕しようと呼びかけられた。その会議は夜11時まで及び、会議終了がするとすぐに人民美術出版社と連絡をとり、さっそく創作が始められた。はじめに完成した10幅が『人民日報』に掲載された後、同月10日までに全60幅の連環画の草稿が完成し、その後修正が加えられ、同月25日出版予定を繰り上げて21日に刊行された[9]。連環画創作に参加したのは中央美術学院の教員候一民、韋啓美、宗其香、黄永玉、陸鴻年、黄均、戴沢、油画科（油絵学科）をはじめとする美術学院学生、それに人民美術出版社関係者、総勢30名であったという[10]。中央美術学院に集う気鋭の画家たちがこの連環画創作に携わっていたことがわかる。なお、中央美術学院による連環画は、『連環画報』1960年第６期（総212期）に16幅が掲載されたほか、『人民文学』1960年第４期にも挿絵として15幅が掲載されている。



連環画『為了六十一個階級弟兄（中央美術学院集体創作、人民美術出版社、1961 年 10 月第一版。いま第一版第二次印刷本）
開本 787×1092 ミリ　1/48
全 63 コマ
第二次印刷数 80001-120000


連環画『為了六十一個階級弟兄』（中国電影出版社、1960 年４月）
開本 787×1092　1 /60
全 156 コマ
印刷数 00001-30000

その他に北京では、上述の北京電影製片廠の映画に基づく連環画も４月に刊行されている。

上海では、上海人民美術出版社の賀友直、盛亮賢、羅興、宋治平、王亦秋、周公和、張楚良という7人の絵師によって連環画（『文匯報』編文）が作成された。かれらは、平陸事件の報道をうけ、3月6日、その日の仕事を終わらせると翌日の深夜3時まで作画を続けて14幅の絵を完成させ、その連環画は即日掲載されたという[11]。

連環画創作は上海と北京だけにとどまらない。天津美術出版社は6人、瀋陽の遼寧美術出版社は3人で、60幅の連環画を短期間で完成させ、長安美術出版社と西安美術

専門学校は三日三晩で脚本編集と絵の創作を完成させた[12]。その他、北京幻灯製片廠は解放軍画報社と人民美術出版社の協力のもと、36枚のスライドを完成させたという[13]。

各地で、短期間のうちに連環画が刊行されており、連環画界が総力をあげて「為了六十一個階級弟兄」を伝えようとしていたことが窺える。それでは、平陸事件を扱った連環画のうち、もっとも大部の作品である上海人民美術出版社版を通して、事件がどのように描かれたのかを見てみたい。

連環画は事件をいかに伝えたのか──その２

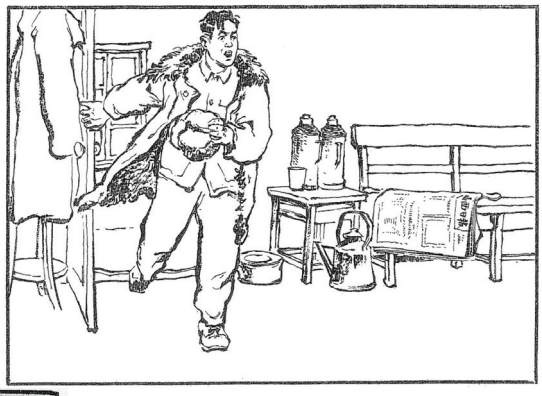
上海人民美術出版社の連環画（全114幅。鍾志堅改編、盛亮賢、賀友直、羅興、王亦秋、宋治平画）は、1960年６月に刊行されている[14]。

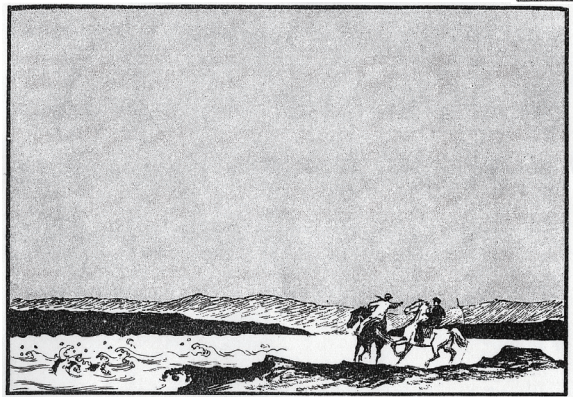
前述の「為了六十一個階級弟兄（連環画創作情況総合報道）」の記述から、連環画刊行の際に絵師が2人減っている。先に14幅が創作されたとあるので、刊行までに100幅ほど増補されていることになる[15]。

連環画では原作に見られる錯時法は用いられず、事件の起きた時間順にそった記述がなされている。これはおそらく、原作がめまぐるしく視点をかえるため、読者が混乱をきたさぬように読みやすくするための配慮であろう。

以下に挙げるキャプションの（　）内は、連環画のコマの前後の脚本（連環画に附される文章）をもとにまとめたものである。

4.
（平陸県共産党委員会の拡大会議の席上に61名の砒素中毒事件が起きたことが知らされる）





19.
（郝書記は会議をすぐに中止し現場に急行する。公安部に事件の調査を命じるとともに、解毒剤を探しに黄河対岸の三門峡市に部下を向かわせた。）

25.
（夜は慣例で黄河を渡らせないことになっていたが、祖国の建設者である階級的同胞たち61名の命がかかっていることを船頭に告げると、かれらは船を出し、黄河の対岸に向けて船を漕ぎだした。）

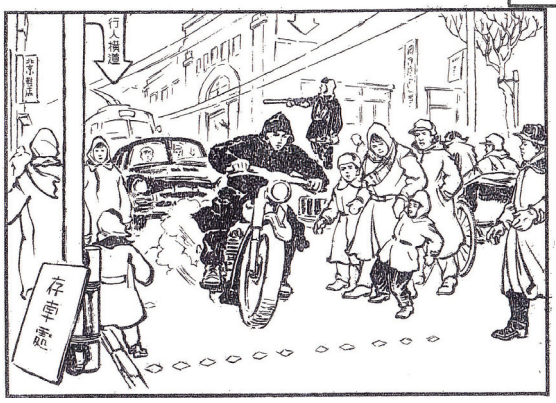




33.
（三門渓でも薬は手に入らなかった。郝書記は北京市特殊薬品商店経営部に電話をかけた。61名の建設工が食中毒症状を起こした。ジメルカプロール1000アンプルが急ぎ必要だ！ 早ければ早いほどよい！）

36.
（旧暦の正月七日はすばらしい“春節の夕べ”の日だ。しかし、知らせを聞くやいなや、かれらはただちに緊急会議を招集した。緊迫した救助の戦いが、首都でも引き続き繰り広げられることになった。）





48.
（バイクに乗り薬品倉庫に急いで向かい、ジメルカプロールを手配した。店から倉庫までは15キロ離れていたがわずかの間で戻って来た。ごったがえす大通りの王府井を通るとき、大声をかけ道を譲ってもらう。）

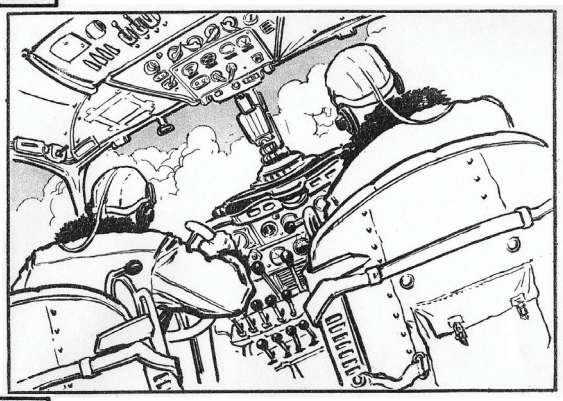
58.
（空軍が薬を空輸してくれることになった。上空から投下したとき、地上の人たちが見つけるために、電気屋の力を借りて、薬を入れる箱に目印として電灯を取り付けることにした。）

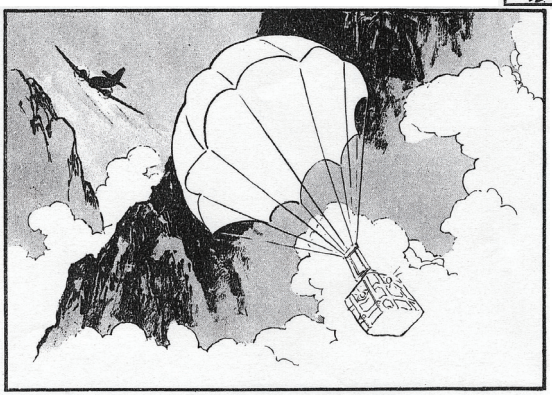




66.
（空軍が空輸すると連絡を受けた平陸県では投下場所に目印となる篝火用の薪を集めていた。幹部や学生、労働者老若男女が薪をもって駆けつけた。）

71.
（雲に覆われ月の光は遮断され、視界は悪化するばかり。無線が地上からの誘導の音声を伝える。機長の周連珊は全神経を集中させて計器を見つめながら操縦桿を握りしめ、飛行機を西へと向かわせた。）

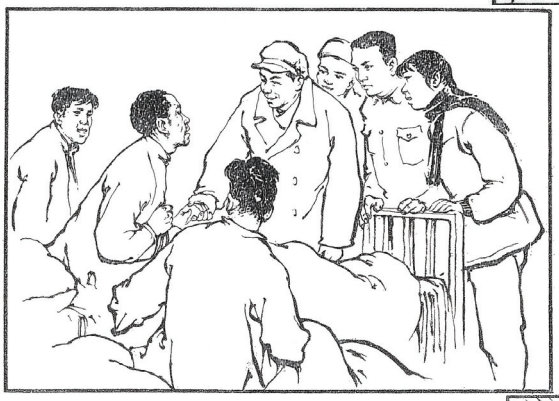




84.
（ぎりぎりまで高度を下げ、地上から目印の炎をみつけると、飛行機から薬品が投下された。ジメルカプロールは落下傘で予定の場所に下りてゆく。）

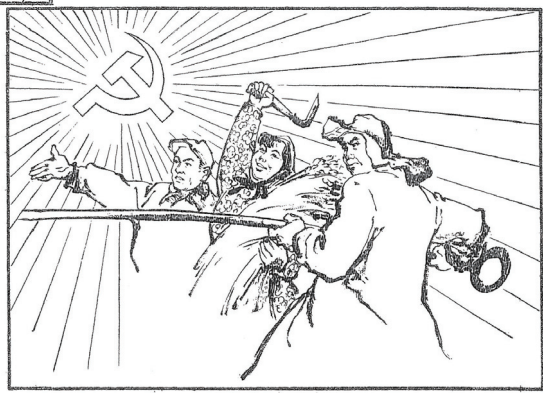
89.
（「神薬」を積んだ箱は落下傘により無事着陸した。薬箱をかかえ、集まった数千人は注意深く周りを取り囲みながら運んだ。）





100.
（労働者たちは一命を取り留めた。みな口々に党へ感謝のことばを述べるのであった。）

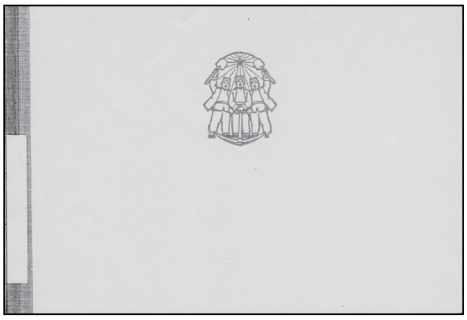
114.
（党と毛主席の深い愛を無尽の力に変えて、我ら偉大なる社会主義の祖国を、天をつく勢いで高速で建設するのだ。党よ、あなたは中国人民の母である。あなたの指導と関心のもと、我らは必ずや輝ける未来に迅速にひた走ってゆくことだろう。）



上海人民美術出版社版は、中央美術学院版とは違い、黒でベタ塗りする処理はあまりされていない。「為了六十一個階級弟兄」に登場する人物の一人一人を描き分け、薬の運搬に利用された、船、バイク、空軍機にいたるまで丁寧に描かれている[16]。本作は、同時代の連環画の教本といえる顧炳鑫『怎様画連環画』（上海人民美術出版社、1958）に見える構図で構成されている。対象との距離による構図の“近景”（33コマ）“中景”（36コマ）“遠景”（19コマ）が使い分けられている[17]のはもちろん、対象をとらえる角度――“平視”“俯視”“仰視”が巧みに使い分けられている。その角度は“視平線”

（視水平線）を画面のどこに置くかで決められる。“視平線”とは、対象を見るときに置かれる視線の位置を水平方向に伸ばしたものとされる[18]。“俯視”では“視平線”が高い位置に置かれ、“仰視”では低い位置に置かれる。投下された薬が落下傘で降下する84コマ目、“神薬”を運ぶ89コマ目は“仰視”で描かれている。貴重な薬が仰ぎ見られる角度で描かれることで、薬の送り手である中国共産党への敬意をも描き出している。19コマ目の黄河を目の前にした場面において、茫漠たる夜を描き出すことに成功しているのは、夜空の色が薄墨で塗られているからではなく、低い位置に視線が置かれることによるものだろう。また、対照を遠くからとらえた“遠景”の66コマは、“俯視”で描かれることによって、近隣から集まる多くの人をフレーム内に捉えている。

顧炳鑫『怎様画連環画』の初版では言及されず修訂版（1965）で取り上げられる“斜視”の構図が71コマ目に見える。気流が乱れ不安定な機内を斜めにした構図で表現している。ラスト114コマ目で集中線の中心にあるのは鎌と槌の図案である。これは言わずと知れた中国共産党の党旗に描かれる図案であり、114コマ目は中国共産党が人々を照らす図である。本作は、連環画絵師たちが連環画技法の基礎を踏まえたうえで技巧を凝らし創作した連環画と言えるだろう。



連環画『為了六十一個階級弟兄』第１版
（上海人民美術出版社、1960 年６月）
開本 787×1092　1/32
印数 0001–1200



連環画『為了六十一個階級弟兄』リプリント
（上海人民美術出版社、2004 年５月）
開本 787×1092　1/32
印数 0001–3100

連環画は事件をいかに伝えたのか――その3

『中国青年報』のルポルタージュ「為了六十一個階級弟兄」では、実は最後まで犯人が誰であるか明かされない。そもそもなぜ人民公社の食事に砒素が入っていたのだろうか？ 事件の最大の関心事と言ってもよい犯人に対する言及がきれいに抜け落ちているのだ。ただ、これは発表された時期と大きな関係があると考えられる。

『人民日報』1960年4月7日第４面の「“平陸事件”的教訓」では事件の顛末として、逮捕処刑された犯人の名前が明らかにされている。事件の主犯は二人。一人の名前は張徳才という。その記事に書かれる張の肩書は、「日本の傀儡軍、蒋介石、閻錫山（民国期の山西軍閥のトップ）に与していた匪賊分子、敵の密偵、平陸県の聖人澗農会主席を殺害し、革命大衆を逮捕し拷問した反革命分子[19]」である。およそ悪者としてのレッテルをすべて貼られているかのような経歴だ。そしてもう一人は、地主階級分子の回申娃である。事件は、回申娃が隠し持っていた砒素が張徳才によって人民公社の鍋の中に投げ入れられたことによるものとされた。

馬貴民「六十一個兄弟中毒揭秘——重訪1960年平陸県特大投毒案始末」（61人の同胞の中毒事件の秘密を暴く——1960年平陸県での毒薬一大事件の顛末を再調査する）[20]によると、実際の事件では、2月2日午後4時に平陸県公安局は通報を受けてから、8時間で容疑者の張徳才と回申娃を逮捕している。その後、一か月かけて取り調べが行われ、3月7日に平陸県検察院に送検された。検察院は翌8日に平陸県法院（裁判所）に起訴し、起訴から４日後の12日に平陸県法院は張、回の被告二名に死刑判決を出している。3月13日、山西省高等法院に、15日には最高人民法院に送られ、22日に最高人民法院は張徳才と回申娃二人に対する死刑判決を認めている。3月24日、山西省高等法院は死刑執行命令を下した。2月2日の夜の検挙からわずか一か月半で死刑が確定している。このようなスピード判決は当時の中国にあっては例をみないものであったようだ。

1960年4月2日、平陸県で公開裁判が行われた。原文“公審”とあるが、公開処刑でもあっただろう[21]。会場には五万人を越える人々が集まり、学校は休校し、店も閉まり、遠く山間部に暮らす人々も県城に集まり、二人の死刑執行を万雷の拍手で迎えたという[22]。

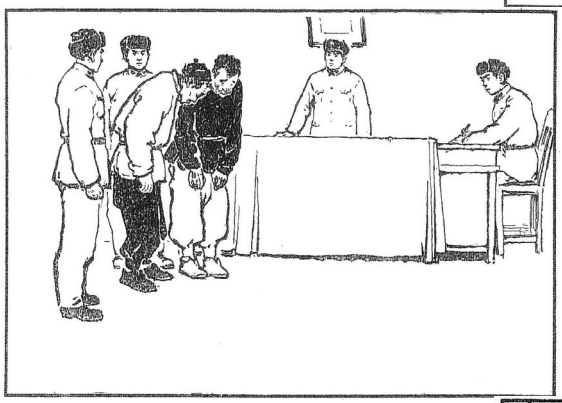
『中国青年報』にルポルタージュが掲載されたのは２月28日であり、二人の容疑者は逮捕こそされているが、刑は未確定であった。事件の改編作は事件に即応しすぎたために犯人の処分まではカバーしきれていない。演劇作品は舞台でどのように演じられたかはわからないが、脚本が残されているものでは犯人についての言及はない[23]。

映画では、全58分うち、開始50分ごろに２分弱のシークエンスで、砒素を混入させた張徳才と回申娃が公安部の調査によって容疑者として検挙されたことが描かれる。さらに書記により二人に対する処分が宣告されるが、容疑者たちの最期までは描かれない。これは映画が二人の死刑執行前に完成していたからであろう。

事件の処分終了後に出された上海人民美術出版社の連環画では、物語の前半部に解毒剤を求めて奔走する裏で公安部の調査が始まり、後半部で容疑者が逮捕されるという構造になっており、張徳才と回申娃が裁かれる場面も克明に描かれている。

105. 公安機関は現地の労働者や大衆の協力のもと、周到な捜査を経て、労働者中毒事件が反革命分子張徳才、回申娃が毒を入れたことを明らかにした。当日、公安は反革命分子二名を逮捕した。

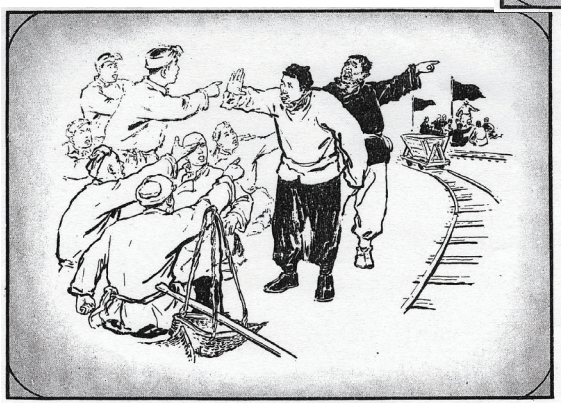




106. 多くの事実の前に、反革命分子張徳才と回申娃は犯した罪について自白した。張徳才は日本の傀儡軍であり、蒋介石、閻錫山の匪賊分子であり、敵の密偵であり、我らが農会主席を殺害し、革命大衆を逮捕拷問したことがあった。回申娃は批判されたことがあり、革命に恨み骨髄の地主階級だ。

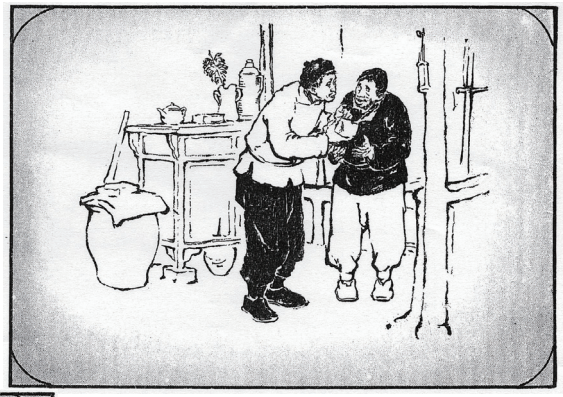
107. 取り調べを経て、事件の真相が明らかになった。反革命分子張徳才は自供した。解放後、かれは過去の罪を隠蔽し、破壊活動を継続した。1958年、かれの過去の罪が調査で明らかにされ、裁判所は平陸で三年間の監視処分を下した。





108.監視・改造の期間、かれは地主の反革命分子回申娃と結託し、統一買い付け・統一販売政策について何度もデマを流し中傷し、建設工を煽動し政府に反対させようとした。建設工たちはかれらの反動的言行を批判した。

109. この二人の反革命分子は恨みを抱き、「復讐する」と公言していた。1960年1月、回申娃は秘蔵の砒素を張徳才に渡した。二人は陰謀をめぐらし、建設工を毒殺する機会を窺っていた。

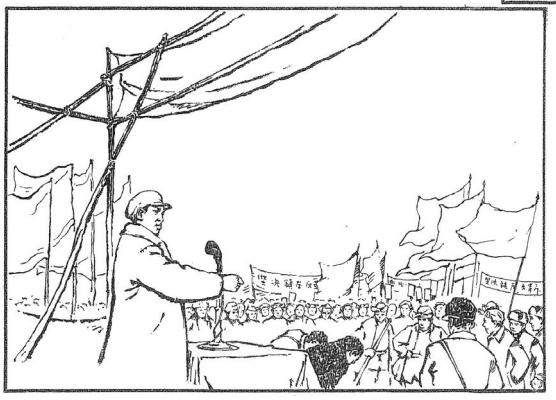




110.　2月2日午後、張徳才は建設工たちの油断に乗じて、砒素をこっそり鍋のなかに入れ、建設工を毒殺しようと愚かな考えを起こした。こうして61人の建設工の中毒事件が起きたのである。

111. 罪状はすべて明らかになった。4月2日、平陸県で公開裁判が挙行された。61名の建設工の代表と平陸県各地の一万あまりの大衆代表は反革命分子の張徳才と回申娃の犯罪を憤怒して告発し、この反革命分子ふたりを死刑に処すことを断固として要求した。





112.裁判は反革命分子張徳才と回申娃の犯罪の事実と大衆の要求にもとづき、最高人民法院の許可を経たうえで、かれらを死刑とし、即時執行した。郭平陸県長は裁判の席で全県民が教訓とし、革命の警戒性を強め、すべての反革命分子を断固粛清せよと呼びかけた。

107から110コマでは四隅に丸みをつけた曲線が書かれている。これは連環画の回想シーンで用いられる“圓角”であり、さらにグラデーションをつけることで他のコマとの時間の違いが強調されている。二人の容疑者は容貌が醜いだけでなく、画面の遠くに置かれ小さく描かれ、“俯視”――見下ろす構図で多く描かれる。階級の敵である“反革命分子”は徹底して卑小に描かれている。111コマ目の公開裁判には毛沢東の肖像が描かれており、“反革命分子”は砒素の解毒剤「神薬」をもたらしてくれた毛沢東の前で裁かれているように見える。なお、1961年に出版された中央美術学院版の連環画にも、公安部による犯人逮捕のシーンがある。ただし、この版では実名はふせられ、社会主義建設を「破壊」しようとする二人の「地主」が逮捕される場面が描かれている。

連環画は文章だけでなく、絵が必要となるため、文字媒体ほど即応性をもって事件に即応できるわけではない。しかし、今回の連環画は限られた時間で、そのプロパガンダの道具としての役割を発揮した。そして、作成に時間がかかる媒体であったからこそ、事件の最後までを伝ええたのであった。

おわりに――「美談」の影にあるもの

最後に平陸事件の起きた1960年2月という時期について考えてみたい。周知のように1958年、毛沢東自身が主導した工業・農業両面において大増産を目指す大躍進運動が始まる。「15年でイギリスに追いつく」というスローガンのもと、鉄鋼の大増産や人民公社化が進められた。しかし、鉄鋼の増産は粗悪な鉄くずを大量に作っただけであり、田畑は荒れ、人民公社は人々の働く気力を萎えさせた。大躍進は大失敗に終わり、毛沢東はその責任をとり、国家主席を1959年に辞任することになる。平陸事件が起きた1960年は、大躍進がもたらした飢饉によって何千万にものぼる餓死者を出した三年の災害の時期にあたる。政治的、経済的な大混乱の時期に現れた「美談」は尋常ではない速さでさまざまな媒体に改編されて広げられた。ここには明らかな政治的な意図があると見るべきだろう。

「61人の階級的同胞のために」の映画版と上海人民美術出版社版の連環画には、上空から投下されたパラシュートで降下する「神薬」を迎えようと集まる平陸県の人々のなかに、山西省の地方劇である蒲劇の女役者が登場する。芝居の衣装そのままに駆けつけた彼女は「お芝居を見ていた人もみんな来たわ！ 毛主席が贈ってくれた神の薬を受け取りに来たのよ！」と言う。一連の救出活動に携わったすべての人々は中国共産党――毛沢東による救出劇の役者であった。ならば、その救出劇の改編作創作に携わった者も広義の救出劇の参加者と言えるだろう。そしてそれらを享受した者は、観

る/読むという行為によって、副次的にではあるが救出劇に主体的に参加していることになる。洪水のごとく提供された改編作は多くの享受者たちを生み出し、かれらは、物語を観る/読むことによって、中国共産党の恩情を目の当たりにすることになる。ここには、社会的混乱のなか、人々の党への求心力を強める狙いがあるだろう。



上海人民美術出版社版 88 コマ目

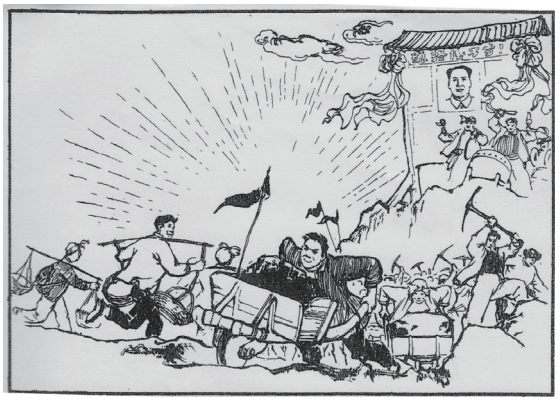
ここで、少し角度を変えて平陸事件について考えてみたい。杜興「61個階級弟兄和他們的“階級敵人”」（61人の階級的同胞とかれらの“階級敵”）[24]は、平陸事件が起きた原因として、大躍進と道路工事の二つがあったと指摘する。大躍進政策のただなか、河南省では三門峡水利プロジェクトが進められていた。このダム建設により黄河流域の三十万にも及ぶ人々が故郷を離れることを余儀なくされた。のちに砒素中毒となる建設工は平陸県の張村公社に所属し、三門峡ダム建設による移民の通行の便のために道路建設に従事していた。かれらは、大躍進のなかで掲げられた高すぎる目標を達成するために、休日返上で工期に追われる最中に人民公社の食事を食べて砒素中毒症状を起こした。裏を返せば、工事さえなければ、そして大躍進さえなければ、事件は起こらなかったとも言える。

杜興は、李敬斎『跨越時空的真情』（（時空を越えた真実）中華聯合商工出版社、1997）のなかに見える平陸事件の犯人として死刑執行された張徳才と回申娃の当時の供述を紹介している。張徳才はなぜ毒を投じたのか。張徳才は1958年、太原の製鉄所で働いていたが、数々の過去の言動が問題視され、原籍地の平陸県に戻され監視管理の処分を受けることになった。1959年10月に風南公路の工事現場に配属された当初は、張徳才は仕事ぶりが評価され、すぐに第三中隊のなかの第三小隊長を任されるようになった。しかし、大躍進の目標を達成するために連日無理な労働を強いられていたため、ある日、張徳才は午後の工事再開の合図に気が付かず寝坊をしてしまった。ひとつのミスが原因で批判されてから、張の勤務態度について長時間の批判が行われるようになった。その中で張徳才は第三中隊の中隊長仝仁明を憎むようになった。当時の張徳才の供述調書には、張徳才の当時の苦境が述べられているという。張は娘に靴を買おうと思ったが金がなく、他から借りようとしたが誰一人かれに金を貸す者はいなかった。張はすべて仝仁明のせいであると考え、仝に対する復讐のために砒素を投じたとされる。しかし、当時張徳才と同じ中隊にいた劉振江の息子劉克武は、その供述調書

とは異なる見方を示している。かれの父親から聞いた話では、張徳才は多くの人を毒殺しようとしたのではなく、春節の時期に働きたくないので腹痛を起こさせて仕事をさぼろうとしただけだったという。もう一人の容疑者である回申娃は地主階級であり、土地改革の時に地主として批判され土地を奪われたため、共産党や政府に不満を持っていたとされているが、劉克武によれば、砒素は当時殺虫剤として農家ではどこにでもあるものであり、回申娃は地主の養子であり、温厚篤実な人であったというのだ[25]。

いまとなっては張徳才と回申娃に殺意があったのかどうかはわからない。明確な犯意のない未必の故意だったとしても、誰も死に至らなかった事件で“反革命”として二人の人間が「敵」として抹殺されたのは事実だ。政策の影響の積み重ねと小さな不幸の連続が大きな不幸を呼んでしまったのかもしれない。そして、その不幸は、政策の失敗により続く飢饉により荒廃する人心を癒やすために利用されたのであった。

さて、61名の食中毒患者のうち、『中国青年報』掲載の「為了六十一個階級弟兄」のなかで実名が挙げられるのは、呉広新一人のみである。また、連環画『為了六十一個階級弟兄』のなかでも建設工の実名はほとんど出てこない。上海人民美術出版社版では、建設工の一人周満禄が「党と毛沢東はおれたちと心が通いあった人たちだ」と感謝の言葉を述べる。息子呉広新の見舞いに訪れた呉進喜は息子に「毛沢東こそがお前の実の父だ」と感謝の言葉を述べる。政策の失敗により失墜しつつある毛の権威を高めようという狙いも見え隠れする。「感動」のシーンの後、回復した名も無き建設工たちは休日返上で倍の効率で働き、あるものは一日に三日分の仕事をこなそうとする。右の図には、「総路線万歳」、瑞雲が浮かぶ空のもと、さながら現人神のように奉られた毛沢東に見守られ、輝ける紅い旗のもと、工期を三か月早めるという奇跡を作り上げるべく、道路工事に尽力する建設工たちが描かれている。大躍進時期の誇張表現を差し引いたとしても、社会主義中国のために労働に勤しむ麗しき物語とは言えるだろう。しかし、その一方で現代的な観点から冷静に見ればとても「ブラック」な工事現場であったことだろう。『為了六十一名階級兄弟』はあくまで“階級的同胞”のために奔走する人々の物語であり、“階級的同胞”一人一人の物語は後景化されているのだ。



上海人民美術出版社版 117 コマ目

張と回の死刑執行後、『人民日報』「“平陸事件”的教訓」では、社会の安全を保証し、社会主義建設を順調に行うために、すべての反革命分子を粛清し、地主、富農、反革命分子、破壊分子、右派に対する改造と教育を監督し、反革命活動を行おうとする頑迷派には容赦無い処刑をしなければならないと論じる[26]。その後、事件で「階級的同胞」として治療を受けた者のなかにも、事件後、階級性が問われ批判された者もいるという[27]。

多くの人々の善意と努力によって61名の命が救われた「美談」の影には、肝胆を寒からしめる政治的な意図が見える。連環画『為了六十一名階級弟兄』は、社会的経済的混乱のなか人々の心を癒やすための一服の清涼剤としての効果だけが意図されたものではない。党への求心力を強める効果、そして現在と未来の「階級的敵」に刃を突きつける効果、という複数のプロパガンダ的意味合いが込められている。『61人の階級的同胞のために』は、「階級的同胞」のために作られたものでは決してない。その波及的効果を意図した者にとってのおためごかしの物語なのである。

平陸事件では、一部の人々のために、中国共産党からの恩恵が落下傘によってもたらされた。綿密に計算され、人々の協力によって平陸県に無事落下した解毒剤とは違い、政治的経済的に混乱を極めるなか、党からもたらされるべき恩恵は、落下傘のようにあてどなく、そしてすべての人々にゆきわたるものではなかったことだろう。平陸事件の象徴として関連書籍に描かれる落下傘は、皮肉にも中華人民共和国の苦難の六十年代をも象徴しているのだ。

注

[1] 李斛（1919–1975）四川大竹の人。1946 年、重慶中央大学芸術系を卒業し、48 年、清華大学営造（建築）系助教を経て、51 年中央美術学院で教鞭を執る。代表作に油絵「斉白石像」がある。陳履生『新中国美術図史 1949–1966』（中国青年出版社、2000）。以下、画家および連環画作家の経歴は特に注記がない場合、主に同書による。また、一部、「百度百科」を参照した。

[2] 「又一曲共産主義的凱歌」。原文は以下のとおり。「平陆事件的始末，构成了一课最生动的共产主义教材。我们希望每个青年都认真地学习它，学习参加到这个事件中来的那些同志的高尚风格，学习那种勇于舍己为人的精神，学习那种认真负责的作风。特别是，从中深刻体会党的领导作用和党对劳动人民的无限关怀。我们要从这光辉的事件中，接受共产主义的教育，永远热爱党和人民，永远勤勤恳恳、生气勃勃地为人民服务。」

[3] 『記者観察』2009 年第 5 期。

[4] 中央戯劇学院実験話劇院集体創作『為了六十一個階級弟兄』（中国戯劇出版社、1960）、王冀北、封恒山、譚邦元「為了六十一個階級弟兄」（『陝西戯劇』1960 年第 4 期）。

[5] 「「為了六十一個階級兄弟」上銀幕」（（「61 人の階級的同胞のために」銀幕へ）『人民日報』1960 年 3 月 9 日第 8 面）、辛文「凱歌高奏頌英雄──影片“為了六十一個階級弟兄”誕生記」（（凱歌を高らかに奏で英雄を頌えよう──映画“61 人の階級的同胞のために”誕生記）『人民日報』1960 年 3 月 31 日第 8 面）、范陽「共産主義的凱歌　看『為了六十一個階級弟兄』」（（共産主義の凱歌　『61 人の階級的同胞のために』を観る）『電影芸術』1960 年第 5 期）、「一曲時代的英雄交響曲　記影片『為了六十一個階級弟兄』在平陸」（（時代の英雄交響曲　平陸での映画『61 人の階級的同胞のために』のこと）『電影芸術』1960 年第 5

期)。本作には映画監督の崔嵬（1912–79）も役者として参加している。映画脚本に、北京電影製片廠集体、謝添、陳方千「為了六十一個階級兄弟（紀録性芸術片劇本)」(『電影芸術』1960 年第 3 期)がある。今回、執筆にあたり映画「為了六十一個弟兄」の映像資料を好並晶氏から提供いただいた。記して感謝いたします。

[6] 中央音楽学院『為了六十一個階級弟兄』(音楽出版社、1960)。主題歌「共産主義凱歌」は放平作詞、瞿希賢作曲。

[7] 胡治農注音『為了六十一個階級弟兄』(安徽人民出版社、1960)、中国青年報記者原著、尤璇注音『為了六十一個階級弟兄』(文字改革出版社、1960)。

[8] たとえば、知侠『鉄道遊撃隊』(1954）の改編作に関しては、拙稿「消された「少年」、足された「大人」──連環画『鉄道遊撃隊』に関する覚書」(『饕餮』第 18 号、中国人文学会、2010）を参照。

[9] 現在、筆者が実見できた連環画は人民美術出版社の 1961 年版である。中国のネットオークションで 1960 年 3 月に出版された人民美術出版社版が出品されており、3800 元の値がつけられていた。全 56 コマ。最後の 56 コマ目は左右 2 コマ分のパノラマになっており、これは『人民文学』所収のコマと同じものと見られる。1961 年版には修正のうえ追加された説明がある。1960 年版と 1961 年版との異同については引き続き調査をしたい。出版時期から考えると、1960 年版には砒素混入の容疑者逮捕に関するくだりがないと思しい。なお、1961 年版は武田雅哉氏から提供いただいた。記して感謝します。

[10] 候一民（1930– ）河北高陽のひと。1946 年国立北平芸術専科学校に入り、同校の中共地下党員の責任者となる。中央美術学院で教鞭をとり、油画系副主任、壁画系主任を歴任。
韋啓美（1923–）安徽安慶のひと。1942 年、南京中央大学芸術系に入学。47 年、北平芸術専科学校卒業後、そのまま教鞭を執る。建国後は、中央美術学院油画系教授となる。
宗其香（1917–1999）江蘇南京のひと。1944 年、重慶中央大学芸術系を卒業。46 年、北平芸術専科学校講師となる。中央美術学院では、水彩科、山水科主任を歴任した。
黄永玉（1924– ）湖南鳳凰のひと。1940 年から、福建厦門集美学校、徳化師範学校で絵画を学ぶ。47 年、上海で木刻運動に参加する。1953 年から中央美術学院で教鞭を執る。作家沈従文の親戚としても知られる。
陸鴻年（1914–1989）江蘇太倉のひと。1936 年、輔仁大学美術系卒業後、そのまま教鞭を執る。建国後、中央美術学院で教鞭を執る。
黄均（1914–）北京のひと。1928 年中国画学研究会に入る。北平芸術専科学校講師を経て、中央美術学院で教鞭を執る。
戴沢 (1922–) 四川運陽のひと。1946 年中央大学芸術系卒業後、北平芸術専科学校で教鞭を執る。北平芸術専科学校が中央美術学院に改組されると、同学院油絵系教員となった。

[11] 前掲「為了六十一個階級弟兄（連環画創作情況総合報道）」。

[12] 前掲「為了六十一個階級弟兄（連環画創作情況総合報道）」。また、連環画研究の中国のウェブログ「従頭来的 BLOG」2006 年 7 月 6 日のエントリー「談談『為了六十一個階級兄弟』連環画」(連環画『61 人の階級的同胞のために』について）(http://www.blog.sina.com/cn/s/blog_4a05d05c010053x.html 最終アクセス日 2014 年 12 月 26 日)は平陸事件の連環画の版本を表紙の図像とともにまとめている。1960 年 3 月出版された版本として、人民美術出版社版と上海人民美術出版社版のほかに、天津人民美術出版社版 (60 開本、初版印刷数 2 万冊)、遼寧美術出版社版 (於非改編、王弘力等絵画、60 開本、50 頁、初版印刷数 2 万冊)、山西日報出版社版（兪大中詩、兪潔絵画、56 開本、頁数不詳、初版印刷数 3 万冊)、長安美術出版社版（朱鵬改編、西安美専絵画、60 開本、頁数不詳、初版印刷数 10 万冊)、浙江省人民美術出版社版（浙江人美編絵、60 開本、頁数不詳、初版印刷数 2.01 万冊）を挙げる。

[13] 前掲「為了六十一個階級弟兄（連環画創作情況総合報道）」。なお、『人民日報』1960 年 3 月 15 日第 8 面には、北京幻灯製片廠の新作スライドとして「為了六十一個階級弟兄」が 3 月 18 日から供給される旨の広告が掲載されており、そこでは「カラースライド 37 枚」と紹介されている。

[14] 以下の人名の注記は施大畏主編『上海現代美術史大系1949-2009 6 連環画巻』(上海人民美術出版社、2010）による。また、一部、「百度百科」を参照し追記した。

盛亮賢（1919-）上海青浦のひと。1940年、上海新華影片公司でアニメーションを作成に携わる。50年上海華東人民出版社で連環画創作に協力。52年、新美術出版社、上海人民美術出版社で連環画創作員となる。連環画の代表作に、『木匠迎親』（沈悌如との合作）、『枯木逢春』がある。
賀友直（1922- ）浙江鎮海のひと。1949年に連環画創作を開始。52年に上海連環画工作者学習班に参加。この年に新美術出版社に入り、専任連環画創作員となる。56年、上海人民美術出版社に入ったのちも、連環画創作員に。連環画を100作近く手がけている。代表作は『山郷巨変』。日本における賀友直氏の連環画に関する論考には、稲次美穂「連環画『李双双』を1.3倍楽しむために」（『連環画研究』第1号、連環画研究会、2012年3月）、田村容子「小説から連環画へ──王汶石『新結識的夥伴』とその連環画作品について」（『野草』第93号、中国文芸研究会、2014年2月）がある。
羅興（1922-1994）上海のひと。別名に羅孝芊がある。上海美専と上海新華芸専で西洋画を学ぶ。1942年、上海滬江大学を卒業。中華人民共和国成立後は上海人民美術出版社で連環画創作に従事する。連環画の代表作に『林海雪原』がある。
王亦秋（1925- ）王野秋とも。前鋒出版社、新美術出版社を経て、上海人民美術出版社副編審を担当。『楊門女将』は第一回全国連環画コンクールで絵画二等賞を受賞。
宋治平（1933- ）宋彬とも。江蘇丹徒のひと。西洋画で知られる陳盛鐸のもとで絵を学ぶ。上海美術出版社で編集を担当。連環画作品に『回民支隊』がある。

[15] 前掲「為了六十一個階級弟兄（連環画創作情況総合報道）」。
[16] 人民解放軍空軍が利用した飛行機はイリューシン 14 か。
[17] 現代中国語では映画用語の訳語として用いられる。“近景”は「バスト・ショット」（胸から上のショット）、“中景”は「ミディアム・ショット」（膝より上のショット）、“遠景”は「ロング・ショット」（広々とした背景を写したショット）にあたる。これらの映画用語は、距離だけでなく、カメラのフレームにどこまで収めるかによる分類であり、『怎様画連環画』における用語とは微妙に違う。ただ『怎様画連環画』に見える用法は、当時にあっては一般的であったようだ。
[18] 文金揚「要注意透視的学習」（（遠近法の学習には注意しなければならない）『美術』1956 年第 2 期）では、視平線を「画面におけるすべての形象の遠近の変化の基準」とし、「絵を描く者が“平視”する（まっすぐ見る）とき、海の水平線や平原の地平線が“視平線”である」とする。
[19] 前掲「“平陸事件”的教訓」。原文は以下のとおり。「伪军和蒋介石、阎锡山匪帮分子，敌人的情报组长，杀害过我平陆县圣人涧农会主席、逮捕和拷打过革命群众的反革命分子」。
[20] 『新聞三昧』1998 年第 5 期。
[21] 「六十一個階級弟兄中毒事件真相大白 放毒凶犯張徳才、回申娃被処刑」（（61 人の階級的同胞中毒事件の真相が明らかに 毒を入れた凶悪犯の張徳才、回申娃処刑さる）『人民日報』1960 年 4 月 7 日第 7 面）。
[22] 注 19 と同じ。余談になるが、筆者は 1998 年夏、湖南省鳳凰県での公開裁判にたまたま居合わせたことがある。けたたましいサイレンが鳴ったため、宿から通りに出ると、武装したトラックの荷台に罪人が拘束され護送されていた。公開裁判の会場となった人民広場（現沈従文広場）には近隣から人が集まり、機を見るに敏な物売りも多く現れ、人々はさながら祭りの見物のように公開裁判を見ていた。刑の軽いものから順に呼び出され、罪状と逮捕日が紹介されたのち刑罰が告げられる。そして最後には死刑を求刑された被告数名が演台の中央に引きずられ死刑判決を受けていた。公開処刑ではなかったが、判決後、死刑囚は即日刑場に送られた。翌日、死刑執行完了を告げる法院のビラが貼り出されていた。筆者は「阿 Q 正伝」の未荘の人に期せずしてなってしまった。公開裁判や批判闘争の方式には人道的観点から批判的な向きもあるだろうが、当時の中国の大多数の人々にとっては祝祭的なものでもあったであろう。
[23] 注 4 と同じ。
[24] 『先鋒──国家歴史』2008 年第 4 期。
[25] 前掲杜興「61 個階級弟兄和他們的“階級敵人”」。
[26] 前掲「“平陸事件”的教訓」。
[27] 石耕「“為了六十一個階級弟兄”背後的故事」（（“61 人の階級的同胞”背後の物語）『文史精華』2009 年第 11 期）。